

基礎情報

No. 275	名称 いれいひ かいじょうていしんきちだいさんじゅうだいたい
不明	慰霊碑 海上挺進基地第三十大隊

建立年月日 1982(昭和57)年1月14日	改修・移設等歴 —
---------------------------	--------------

所在地番 宮古島市城辺字下里添佐事川1384番7	座標 24.77147583	地目 原野	地積 (㎡) 3323.00
-----------------------------	-------------------	----------	-------------------

規模 (幅M×奥行D×高Hcm) [主碑]全体:201*158*67、碑身:181*46*100、戦没者名記板:60*40 / [由来記碑]全体:81*16*120、由来記碑板:70*80

素材 【主碑】碑身:鉄筋コンクリート造+正面貼付け[文字板:黒御影石磨き仕上]+背面貼付け[建立者名記板:ステンレス]、上台:コンクリート、下台:鉄筋コンクリート造+細粒黒御影石砕砂利洗出し仕上+上面貼付け[戦没者名記板:ステンレス]、基壇:鉄筋コンクリート造 / 【由来記碑】碑身鉄筋コンクリート造+細粒黒御影砕砂利洗出し仕上+正面貼付け[由来記板:ステンレス] / 【納骨箱】CB積み上部コンクリート固め

建立者 旧海上挺進基地第30大隊戦友遺族有志	管理者 不明
---------------------------	-----------

碑文等

【主碑】
 <前面> 慰霊碑/海上挺進基地第三十大隊
 <後面> 昭和五十七年一月十四日/戦友遺族有志建之
 <台座前面> [略]

【由来記碑】
 <前面> 慰霊碑文/海上挺身基地第三十大隊は海上挺身第三十戦隊の特攻艇の秘匿用壕等の洞窟構築するため昭和十九年九月十六日久留米にて編成され、十一月二十二日宮古島に上陸した。上陸後は平良の町の西海岸から久松部落北部海岸にその洞窟を構築することになった。/宮古島は堅固な珊瑚礁の岩盤でこれに洞窟を構築することは極めて至適の作業であった。又気象・風土等急激な変化の中で主食は甘藷という極めて極めて悪条件が加わり戦わずして栄養失調症で尊い生命を散華されたのであった。三月一日の南西諸島全島を襲った米軍機の空襲は奄美大島まで追■していた第三十戦隊に全滅に近い損害を与え宮古島まで前進出来なくなった事は極めて痛恨事と言わざるを得ない。この破壊で戦隊と行動を共にしていた部隊の六名が戦死された。このため久松部落の洞窟は全く使用することなく涙をのんで放棄することになった。その後は陸軍中飛行場の北方山中部落に転進し新陣地構築を併せて自活作業が強化されることになった。四月に入り米軍の沖縄本土への上陸が開始されるや、艦載機の飛襲は日に増して激化してその目標は飛行場に向けられ危険度を増加してここで七柱が散華された。それに加え内地よりの食糧の補給化全く途絶え栄養失調症に風土病のマラリアが加わり投与する薬もなく、艦砲射撃が五月四日飛行場附近を襲った。六月二十三日沖縄本島の玉砕の報がもたらされたが空襲は益々熾烈をきわめて来た。八月十五日戦争終結の詔勅を拝し安堵感があったが、今まで祖國の勝利を信じ戦ってきた戦友達は敗戦の宣告に為す業もなかった。復員船が来るまでは復員の実感が湧かなかったが、それまでは食うための自活作業が強化された。戦後の虚脱感に襲われ病魔に倒れる戦友が終戦前より増加した事は誠に痛ましい事であった。/我々の多くは無事復員する事が出来たが、この宮古島には戦死者六十柱の遺骨を残す事になって、誠に心残りであった。其の後遺骨は故郷の御遺族の元へ無事帰還されたが戦友達の脳裡には散華された英霊の面影が灼きつき一刻も離れることはなかった。心にかかり乍ら戦友の混乱の中に祖國復興の槌音が高らかに響いていたが戦友遺族の消息は全く絶えていた。最近になってその消息も次第に明らかになり遅きに失したが昭和五十六年五月六日久留米に於て慰霊祭を挙行了。御遺族の中には父兄の出征の際その顔さえも覚えていなかった幼児が今は社会人として立派に成長され父兄の顔を偲ぶ■切なる時を迎へ戦友御遺族相計り 御英霊達の鎮魂の地に生前の勲功を顕彰し慰霊の碑を建立する次第である。

写真

